

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第9号】
平成31年
1月18日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

平成時代から次の新しい時代を展望しつつ

教育長 勝又 将雄



新年、あけましておめでとうございます。今年は「亥年」。いよいよ平成三十一年のスタートです。同時に「平成」年の最後の年となります。毎年伝えていますが、この慌ただしい年末年始の休暇の家庭生活で心身をリフレッシュできただでしょうか。様々な思いを抱いて新年を迎えたものと推測します。「日々新」の日常生活の積み重ねの先に見える「新しい自分・世界」を思います。今年もよろしくお願いたします。

◆ 年末に何冊か集中して本を読みました。最近の自分の読書はどちらかと言えば手軽に読める新書本が多くなっています。その延長線には近い将来（七十歳になったら）の「自己未来像」を表現すれば「知的な引きこもり」生活においているからです。「読む」こと「聴く」ことによる刺激と、「見る」ことによる納得と、「書く」こと、「話す」ことによる生きがいと張り合いといった日々の生活の充実です。孤立するわけではありません。

自己の時間管理の在り方です。たとえば、孫たちの成長を家族で共有する生活の中で、『本・こども・絵本』（中川李枝子・文春文庫）は、「絵本は、生きることは素晴らしい」としつかり覚えこませるチャンス」の言葉に身に沁みます。また、二〇二〇年の話題はにぎやかですが、その先の「我がまち」はどうなるのかなと『どうする地方創生』・日経プレミアシリーズを読みました。内容はかなり刺激的でした。さらに、「自分で考えるために」をキーワードとする『質問する、問い返す』・名古屋隆彦・岩波ジュニア新書。まさに「主体的に学ぶ」ということ」の具体を記者の視点でのルポでした。新書の自身の軽さを言われませんが、「難しい事は易しく」の本として受け止め、日々低下する知的レベルの充電をしつ

つ、毎月かなりの新書を読んでいます。出張の折に電車の中で一冊読了、の生活でもよいと思います。

◆ 市役所職員の新規採用教職員も義務教育学校の教職員も、この二十年くらいで確実に変わったと実感することがあります。「新聞を読まない」「本を読まない」人たちが増えて、昨年も今年も新聞を読んでいる新人は（ゼロ）でした。さて、情報獲得の手段は皆さんどうされているのでしょうか。スマホの全国のニュース情報。地域の情報はやはり地元紙です。一日分単位の読み込みでも日々の生活に変化があります。確かに今の時代は急激に様変わりしています。この十年間でケータイはスマホに変わりました。その前のポケベルの話にしても意味不明だろうと思います。

時代の流れは想像以上です。その中にあるもまだ新聞は人々の「社会」学習の大きな役割を担っています。特に地元紙はそうした情報の紙面で満載です。親子、夫婦の会話同様に、朝の五分。夕方の二十分という時間でも情報は取れます。新年ゆえに「生活の

見直し」をお勧めします。

◆ 御殿場市は随分と前から静岡県の先駆けで市立養護学校を設置しました。現在は県立へと移管して、県立御殿場特別支援学校となっています。市内に十六の小中学校がありますが、現在高根中学校を除いて十五の学校に「特別支援学級」が設置されています。もちろん、特別支援学校と特別支援学級では在籍の子供たちの状況は異なります。基本的にはより個別の指導を必要とする子供さんたちですが、本市の特別支援学級には「知的障害」と「自閉症・情緒障害」の二種類あります。知的障害学級生徒は特別支援学校へと進学可能ですが、自閉症・情緒障害生徒は、通常の高校への進学となります。立場を変えつつも通常の高等学校に特別支援学級の開設を要望して十年以上たちます。実現していません。そうした現実の話が一般社会だけでなく教育界においてもまだまだ浸透していないことを憂います。

◆ 昨年末の今年の漢字一文字は「災」でしたが、ことわざにあるように「災い転じて福となす」の通りの新しい年

を展望します。冬の先には春の訪れがあります。年末年始にこんなことをあれこれ考えているうちに三学期がスタートしています。この三か月間はあつという間です。我が学校らしい、その学級らしい年度の「締めくくり」を意識した教育活動は、当然ながら次年度の教育展望とつながりません。子供たちの一年間の成長を実感できる年度末を期待します。

平成時代最後の年となります。今年もよろしくお願いいたします。

答えなき問いに立ち向かう子供の育成

主席指導主事 小林 徹

「予測不能な社会を生き抜くために必要な資質、能力の育成…」答えなき時代を生き抜く子供の育成を…などのフレーズを聞くようになり久しいです。しかし、私にはこのことが「わかるようでわからない」そんなモヤモヤ感をずっと持っていました。子供たちに対して、具体的に何をどのようにしていけばよいのか、今ひとつ明解になって

いませんでした。

そんな中、平成二十年度後半、ある学校の指導訪問に同行させていただいた時に、その答えに結びつく場面に会うことができました。それは、五年生の国語「宮沢賢治に代わって本の魅力を伝えよう」「注文の多い料理店」の中の優れた叙述について、自分の考えをまとめる授業でした。とにかくこの授業は子供たちが様々な思いを伝え合い、語り合い、主体的に学んでいました。授業の後半、ある少年が横の仲間と宮沢賢治の気持ちを追いかけている中で、「命を粗末にはしていないよ。僕はこのクラスのみならず」と仲良く生活していきたいよ。そしてこの世界が平和になつてくれたらいいな…」と自分の思いをつぶやきました。五年生の少年が今勉強している宮沢賢治の思いを飛び越して、自分の生きてきた背景をも含めた考えをつぶやいていたのです。

国語「注文の多い料理店」の授業でありながら、この子自身や他者の生き方、社会への要求までを語る事ができる…。これまでの先生や学校

の実践の成果を見ることができました。

彼のこのつぶやきが、新たな問いとなり、「世界が平和になるには、僕たちはどうしたらよいのだろうか」という答えなき新たな問いを仲間が発し、そしてその問いを自分事のように皆で引き受けていくことができるようになっていくことができたように思いました。子供たちは、答えなき時代のひとりの武器を持つことになるとのだからと感じました。

子供たちの問いは、ここでいう、世界平和を考える、という壮大なスケールの話だけではありません。最近、仲がぎくしゃくしている仲間のことや、きのう喧嘩した隣の席の子との折り合いのつけ方、男女の仲の解消など、身近な話題・問題まで答えなき問いは様々だと思えます。

人間力・社会力を育成していく上での根幹は教育です。このような答えなき問いに主体的に立ち向かっていく子供の姿を見ていると、たくましさを感じるとともに嬉しさがあふれてきました。



考え、議論する道徳

指導主事 中西 直子

教科書を使つての新しい道徳の授業…どのように授業をデザインしていけばいいの？ どう評価していけばいいの？ と、戸惑いの声が多く聞かれます。

そんな中、高根小・中学校では、平成二十九年より御殿場市の指定を受け、「考え、議論する道徳」を創造していくために、「授業のあり方や評価の仕方について、先行的に研究を進めています。

新学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」を道徳科において率先して取り入れることで、子供たちが様々な問題を考え議論する道徳の授業に転換することが可能となります。問題意識を生かして主体性を高め、協同的な議論を通して、能動的かつ問題解決的な深い学びを促す授業をめざして、両校では、まず子供が興味をもつて切実に考えたいような道徳的価値を設定するところから授業づくりが始まります。もちろん、子供理解を抜きにして考えることはできません。

高根小では資料に向かう前の、児童の良さを教員間で共有し、分析シートを用いて教材分析を行い、中心発問を練っていきます。主体的な学習にするためには、子供の問題意識が重要であり、思考の過程に沿って展開を仕組んでいく必要があります。その根本に子供理解があります。その検証として、抽出意見を設定し、児童の発語記録を取り、自分のこととしてとらえ他と交流することを通して、多面的・多角的に思考することができたかどうか詳細な分析を行い、評価や授業改善に生かしていきます。この詳細な分析の蓄積により、指導と評価の一体化が進み、教師の子供を看取る目も鋭くなっています。

高根中では議論につなげるために、目盛つき数直線やマトリックス表を用いて板書を工夫しています。お互いの意見を「見える化」し共有することで、多角的・多面的に考えるきっかけを作っています。子供が頭に汗をかいて考え議論する道徳授業。研修を通して、そんな授業を教師自身が考え、議論していきたいものです。